

英語語法文法学会 第 25 回大会資料

日 時：2017 年 10 月 21 日（土）

開催校：専修大学神田キャンパス

住所：〒101-8425 東京都千代田区神田神保町 3-8
<https://www.senshu-u.ac.jp/access.html>

順路：

水道橋駅（JR）西口より徒歩 7 分

九段下駅（地下鉄東西線・半蔵門線・都営新宿線）5 番出口より徒歩 3 分

神保町駅（地下鉄半蔵門線・都営三田線・新宿線）A2 番出口より徒歩 3 分

英語語法文法学会

The Society of English Grammar & Usage

September 2017

英語語法文法学会

第 25 回大会プログラム

大会参加費：学会会員 1,000 円／当日会員 一般 2,500 円 学生 2,000 円（予稿集代を含む）

日 時：2017 年 10 月 21 日（土）

＜1 号館地下 2 階のカフェテリアが利用可能です（11:00-14:00）。また、周辺にはコンビニ、飲食店が多数あります。＞

開催校：専修大学神田キャンパス

住所：〒101-8425 東京都千代田区神田神保町 3-8
<https://www.senshu-u.ac.jp/access.html>

順路：

水道橋駅（JR）西口より徒歩 7 分

九段下駅（地下鉄東西線・半蔵門線・都営新宿線）5 番出口より徒歩 3 分

神保町駅（地下鉄半蔵門線・都営三田線・新宿線）A2 番出口より徒歩 3 分

開催校委員：濱松純司

開催校協力委員：牛江一裕、林龍次郎

大会実行委員：滝沢直宏（委員長）、西田光一（副委員長）、五十嵐海理、
大竹芳夫、吉良文孝、住吉 誠、林龍次郎

●ワークショップ（1 号館 2 階 204）●研究発表（1 号館 2 階 203、204）●総会（1 号館 3 階 302）●シンポジウム（1 号館 3 階 302）●一般休憩室（1 号館 3 階 301）●書籍展示（1 号館 3 階 301）●司会者・関係者（ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者）控え室（1 号館 4 階 ゼミ 43）●大会本部・運営委員会室（1 号館 2 階 208）●アルバイト控え室（1 号館 2 階 209）

受付：10 時 00 分より 1 号館 2 階

ワークショップ（1 号館 2 階 204）10.30 – 11.38

司会 住吉 誠（摂南大学）

- 「Doyle, C. の作品資料に基づく、‘help’, ‘aid’, ‘assist’ の語法上の段階性」
渡邊丈文（元・青山学院大学非常勤）
- 「because に課される 2 つの制約について」
大野真機（昭和大学）
- 「後位修飾語 combined の語法」
中澤和夫（青山学院大学）
- 「あいまい構文 It is that ... の本質」
八木克正（関西学院大学名誉教授）

受付：12 時 30 分より 1 号館 2 階

研究発表 13.00 – 14.45

第 1 室 (1 号館 2 階 204)

司会 都築雅子 (中京大学)

1. 13.00 – 13.35 「他動詞 eat が目的語を省略すべきとき：有標形を支える原理」
西脇幸太 (岐阜県立岐阜北高等学校)
2. 13.35 – 14.10 「I played a role in translating Japanese into English. の in は脱落する」
桑名保智 (旭川医科大学)
3. 14.10 – 14.45 「動詞 visit の意味と位置づけ」

出水孝典 (神戸学院大学)

第 2 室 (1 号館 2 階 203)

司会 五十嵐海理 (龍谷大学)

1. 13.00 – 13.35 「un-sad 類の空白とその動機づけ」
萩澤大輝 (神戸市外国語大学大学院)
2. 13.35 – 14.10 「「クジラ構文」に見られる条件性と対偶解釈読み」
廣田 篤 (金沢大学大学院)
3. 14.10 – 14.45 「実現を含意する not (...) until の用法」

明日誠一 (青山学院大学非常勤)

総会 (1 号館 3 階 302) 15.00 – 15.20

総合司会		吉良文孝 (日本大学)
開会の辞	会 長	大室剛志 (名古屋大学)
開催校代表挨拶		佐々木重人 (専修大学長)
学会賞選考報告	会 長	大室剛志 (名古屋大学)
事務局報告	事務局長	吉田幸治 (近畿大学)

シンポジウム (1 号館 3 階 302) 15.35 – 17.45

テーマ「英語の文をつなぐ接続現象」

司会 大竹芳夫 (新潟大学)

1. 「「文をつなぐ」仕組みと「文をつながない」仕組み」 大竹芳夫 (新潟大学)
2. 「談話標識がつなぐもの」 松尾文子 (札幌保健医療大学)
3. 「話し手の「心」を伝える文のつなぎ方」 安井 泉 (筑波大学名誉教授)

閉会の辞 濱松純司 (専修大学)

懇 親 会 1 号館 1 5 階ホール

18.00 – 19.30

(懇親会費：一般 5,000 円 学生 3,000 円)

ワークショップ（1号館2階204） 10.30 – 11.38

司会 住吉 誠（摂南大学）

Doyle, C.の作品資料に基づく、‘help’, ‘aid’, ‘assist’ の語法上の段階性 渡邊丈文（元・青山学院大学非常勤）

‘help’ がとる語法は多岐に渡るため、先行研究を通して主要な形式を参照しつつ、Doyle, C.の作品資料であり、文体としての統一性をもった Sherlock Holmes 九シリーズを素材として、そこに出現する語法を比較検討しながら異同を探る。たとえば、‘help’ に関しては、語法の一つとして、‘help+to 不定詞’ が主体であり、‘help+動名詞’ の事例は一般的には用いられないとされている。ただし、Doyle, C.においては、

(1) How could I help suspecting him, (Doyle, C., *Adventures*)

の様に、‘help’ が動名詞をとっている唯一の事例もある。他方、‘help+人+in NP’, ‘help+人+with NP’, ‘help+NP（物）’のNPについては、具体例を全て列挙して特徴を精査する。また、Dixon(2005: 491)では、動詞の分類中における‘Helping type’の具体例として、‘help’ 以外に、‘aid’ や‘assist’ も加えている。それらについても同様に、Sherlock Holmes 九シリーズを素材として、そこに出現する語法を調べた上で、三者の間に語法上における段階性（‘gradience’）があることを結論として提示する。

because に課される 2 つの制約について

大野真機（昭和大学）

一般に「推量の because は文頭に現れない(制約 1)」こと、および「推量の because は否定の作用域に入らない (制約 2)」ことが知られている。

(1) The ground is wet **because**_{causal} it has rained.

(cf. **Because** it has rained, the ground is wet.)

(2) It has rained, **because**_{inferential} the ground is wet.

(cf. ***Because** the ground is wet, it has rained.)

(3) Tom hasn't left **because** his wife isn't here.

(<inferential reading> It is because his wife isn't here that I believe that Tom hasn't left.) (Blakemore 1987:78)

他方で、**Just because the ground is wet doesn't mean that it has rained.**のような文においては、「Just because 節は inference を引き起こし、後続する doesn't mean がそれを打ち消す」こと、およびこの構文の持つ譲歩の意味は「inferential because が否定の作用域にある」ことが言われているが、こうした分析は先の 2 つの制約に違反してしまっている。本発表では、この構文の使用の実際を広く取り上げ、整理・分類し、because に課される 2 つの制約との関わり合いを再検討する。

後位修飾語 combined の語法

中澤和夫（青山学院大学）

名詞を後位修飾する語（句）は、通例、関係節の縮約されたものと考えられる。次例では written... が a book を後位修飾している。

(1) a book that is written by John → a book written by John [WHIZ Deletion]

本発表で取り上げるのは combined が名詞を後位修飾している例である。

(2) a. More particles are contained in the first receptacle than in [all the others combined].

b. China is larger than [Japan and Korea combined].

本発表では、まず、(2a, b)の角括弧部分は同じように combined が直前の名詞を修飾しているように見えるが、実はそうではないことを指摘する。

(3) a. More particles are contained in the first receptacle than in [all the others that are combined].

b. *China is larger than [Japan and Korea that are combined].

次に、(2b)は、実は(2a)に基づいた派生的な拡張構文であることを論じる。第3に、この拡張は、(4a, b)の拡張と軌を一にしたものであることを論じる。

(4) a. John is said to be a genius. (cf. *They say John to be a genius.)

b. John, I alleged to be a fool. (cf. *I alleged John to be a fool.)

あいまい構文 It is that ... の本質

八木克正（関西学院大学名誉教授）

本発表は、大竹 (2009)と佐藤 (2015)の it is that 構文の研究を発展させたものである。it is that は次の4つの別構文が表面上同じ形になったものである。(1) it が明確な指示対象をもつ場合、(2) it が状況を指す場合、(3) that 節が焦点になった分裂文の場合、(4) it is that がモダリティの場合。

(1) If there is a **theme** here, **it is that** these presidents, far from riding on the back of history, are instead driven by forces beyond their control. (COCA)

(2) Hope makes our definition of who is included in "Boston" broader and more inclusive. **It is not that** some lives can be returned to what they were before; **it is that** the life of the whole community can be transformed in hope. (COCA)

(3) See, it wasn't being alone or disliked that I minded. **It's that** I couldn't understand where the hell the other people like me were. (COCA)

(4) **It's not that** I didn't want to be with my family; **it's just that** I missed my friends. (COBUILD6)

(4)の it is that は「断定」のモダリティ表現で、it seems that, it may be that などの断定を避けるモダリティ表現と対照させるとその性格が明確になる。

司会 都築雅子 (中京大学)

他動詞 eat が目的語を省略すべきとき：有標形を支える原理

西脇幸太 (岐阜県立岐阜北高等学校)

本発表では、他動詞 eat が目的語を省略「すべき」文脈と、その背後にある原理について議論する。Fillmore (1986)は、いかなる文脈でも他動詞 eat は定目的語省略が不可である、としている。一方、西脇 (2011)は、(1)、(2)を根拠に、他動詞 eat はレシピやラベル表示の文脈においては、定目的語省略が「可能である」という観察を行い、Fillmore の記述を修正している。

(1) To ripen melons, keep them at room temperature for a few days, when ripe store in the fridge and eat as soon as possible. (BNC: A70)

(2) [乾燥剤の表面に印刷されて] DO NOT EAT. (西脇 2011: 119)

しかし西脇 (2011)では、eat が、目的語を省略できるが省略しない方が依然として自然なのか、それとも省略した方がよいのか、という点が明らかにされていない。本発表では、インフォーマント調査の結果を基に以下の 2 点を主張する。第一に、基本形では定目的語省略を許さないとされる他動詞 eat が、有標形として、目的語を「省略することができる」というレベルにとどまらず、むしろ「省略すべき」場合がある、ということである。第二に、その有標形を支える原理は、日常発話ではないレシピやラベル表示の文脈における情報の発信者と受信者との間の共通認識である、ということである。

I played a role in translating Japanese into English.の in は脱落する

桑名保智 (旭川医科大学)

動詞句 play a role は以下の(1)に見られるように、「in + V-ing」に後続されるのが一般的である。

(1) Parents play a crucial role in preparing their children for school. (OALD⁹)

その一方、頻度は高くないものの、play a role に後続する「in + V-ing」の前置詞 in が脱落する事例も観察される。

(2) [...] race plays a role modifying the link between self-control and drug-related behavioral problems. (COCA)

本発表では、四つの統語的環境における「play a role + (in) + V-ing」の前置詞 in の脱落・生起に関わる文法性を記述し、この構文における前置詞 in は特定の場合を除くと随意的であることを指摘する。また、「play a role + (in) + V-ing」と「(in) + V-ing」に後続される類似構文である have trouble, take turns, spend との比較を行い、これらの構文における前置詞 in の随意性は異なっていることを示す。最後に、以上のデータについて De Smet (2013)の主張する IPC (integrated participle clause)の拡散(diffusion)の観点から考察する。

動詞 visit の意味と位置づけ

出水孝典（神戸学院大学）

動詞 visit は、他動詞用法で人や場所を目的語に取るのが通例で、「...を訪ねる」と訳されることが多いが、この語の意味の詳細については、これまで議論されてこなかった。各種英英辞典が visit を、to go and spend time ..., to go and see ... のように定義していることから分かるように、go の部分と、その結果としてその場所に滞在したりそこで人と会ったりする部分の2つの意味要素からなるが、どちらが意味的中心なのかを議論した研究は、発表者の知る限りこれまでなかった。本発表では、Levin (1999), Rappaport Hovav and Levin (2010), Ritter and Rosen (1996), Fellbaum (2013) といった語彙意味論研究の知見を援用しながら、英米の作家によって書かれた小説 33 冊より収集した visit の動詞用法 248 例をデータとして分析し、インフォーマント調査の結果も踏まえながら、以下の結論を主張する。(i) visit はある場所に行ってそこに滞在することを意味するが、語彙化され事象構造に反映される意味的中心部分は滞在することの方である。(ii) visit は様態動詞の一種である目的動詞である。(iii) visit の自動詞用法は、目的動詞であるが故に意味指定が弱く典型的目的語を想起できないため、文脈からの目的語省略に限られる。しかも状況に基づくダイクシスの意味が省略され「やってくる」を表すのが通例である。

第2室 (1号館2階203教室)

司会 五十嵐海理 (龍谷大学)

un-sad 類の空白とその動機づけ

萩澤大輝 (神戸市外国語大学大学院)

現代英語の慣習化した語彙を見ると、un-形容詞パラダイムには空白が見られる。本発表はこれを un-sad 類の空白と呼ぶ。

- (1) a. unhappy, unhealthy, unwell, unwise
b. ?un-sad, ?un-sick, ?un-ill, ?un-foolish

上の分布から「接辞 un-の選択する語基は肯定的評価を表すものに限られる」といった一般化がされている (Jespersen 1917, Zimmer 1964)。反例も指摘されているが、その大半は廃語か臨時語である。共時的に容認性の高い語に限れば、記述として擁護できる。

では非対称的な空白が生じることの動機づけは何だろうか。本発表はこれを参照点と目標の際立ちの差に帰する。この分析は (i) 所有表現など他の言語現象との共通性が捉えられ、(ii) un-形容詞に阻止現象が働かないケースにも説明が与えられるという利点がある。

「クジラ構文」に見られる条件性と対偶解釈読み

廣田 篤 (金沢大学大学院)

(1)の No more A than B 構文の解釈には研究者により揺れがあるが、(2)のクジラ構文の「対偶解釈読み」を基盤に、(1)は(2)の拡張であると主張する。

(1) Nuclear weapons are *no more* a threat to the world *than* an epidemic of bacteria spreading. (平沢(2012: 52))

(2) A whale is *no more* a fish *than* a horse is.

平沢(2012)では、(1)は「原爆が恐ろしいのと同様に、疫病も恐ろしい」と解釈すべきで、「先行命題が真であるのと同様に、後行命題も真である」という特殊なクジラ構文であると主張される。これに対し、八木(2015)では、(1)は「核兵器は伝染病より大きな脅威であるというわけではない」の意味の比較構文であって、「クジラ構文」ではないとされる。(2)は「ウマが魚でないのと同様に、クジラは魚でない」という意味だが、日常言語の条件文(論理形式)として捉えれば、「クジラが魚だというなら、ウマが魚だと言っているようなものだ」という「対偶解釈読み」が可能となる。同様に捉えれば、(1)は「原爆が脅威であるとすれば、疫病も脅威である」の意味になる。つまり典型的な「クジラ構文」のスキーマ的な解釈(後行命題が偽であるのと同様に、先行命題も偽である)が背景化し、「対偶解釈読み」が前景化すると主張する。

実現を含意する not (...) until の用法

明日誠一（青山学院大学非常勤）

本発表では、not (...) until が「状況の実現を含意する」用法を、only との比較で考察する。Declerck (1995)によれば、(1a)と(1b)は共に(1c)を意味する。

(1) a. John didn't wake up until nine. (焦点は nine)

b. John only woke up at nine. (nine は尺度表現で only の作用域は文)

c. John woke up as late as nine. (意味論的には‘no(t) earlier than’)

Declerck (1995)によれば、(1c)は(2a)と(2b)の意味成分から合成されるが、(2b)は(1a)の前提ではなく、会話の含意であると主張する。

(2) a. John didn't wake up before nine. (before=earlier than)

b. John woke up at nine. (語用論的な意味は at nine の部分)

また、Declerck (1995)は、(1a)の倒置文(3a)を VP 否定と仮定するが、(3b)とは異なるタイプの文否定—ただし、作用域自体は文—であると主張する。

(3) a. Not until nine did John wake up. ((3a)≠(3b)なので通常の文否定でない)

b. *It is not the case that John woke up until nine.

最後に、not (...) until に‘recently’(や‘at last’)の読みがあるか検証する。

(4) John only phoned Mary an hour ago. (Quirk et al. 1985: 607)

‘as recently as’を意味する(4)の only も作用域が文である(cf. Taglicht (1984))。

シンポジウム（1号館3階302）15.35 – 17.45

テーマ 「英語の文をつなぐ接続現象」

司会 大竹芳夫（新潟大学）

一見するとそれぞれの文は独立しているように見えるが、実際の使用においては、目に見えない引力や反発力などによって、微妙な力学的構造の中に解き放たれている。文は磁場に合うように姿をととのえて必要とされる場所に居場所をえる。その作業は、話し手と聞き手との駆け引きや、その心のひだを精一杯余すところなく伝える手管や、あるいは逆にそれを隠す手管にうち満ちている。この非可視的な力学的構造と心に潜む心模様の移り変わりをことばに写し取る方法を論ずる。話し手の心の揺れを含めて、実際の文と文との緊張関係を具体的にできる限り目に見える形で明らかにしていく。「英語の文をつなぐ接続現象」をテーマに3名の講師がそれぞれの視点から発表し、英語における文のつながり方をつまびらかにしていく。3つのピースは、「接続現象」という「絵」の中にしかるべき居場所を得てパズル全体を完成するようにはめ込まれていく。

「文をつなぐ」仕組みと「文をつながない」仕組み

大竹芳夫（新潟大学）

本発表では、これまで光が当てられないままであったさまざまな接続事象を掘り起こし、実際の用例を吟味しながら英語の「文をつなぐ」仕組みを論ずる。まず、英語話者の幼児が文の配列順序にことばの生起順序を類像的に見られることを示す事例を概観し、従属接続詞による接続の基本的特性を確認する。次いで、接続詞を介さずに文をつなぐ工夫や方策を検証する。具体的には、話者の心中の情報と新たな情報をつなぎ合わせる際の指示表現 *it* と *that* の選択、話者の価値感覚や配慮意識を具現化する *put my two cents in* (ほんのひと言いう)、*for what it's worth* (ご参考までにお伝えしますが) といった英語特有の接続表現を取り上げて、英語話者の生き生きとした発想を探る。また、静寂の「間」をことばにしてつなぐ手法、突発的に知覚した状況を談話に切り出す *the next thing*、直前の発話内容を引き継ぐ *just because* 節の分析に加えて、*Me too.* < *too* と数字 *two* を掛けている > に続けて *Me three. Me four.* (「僕もだ」、「僕もさ」) と子供たちがことば遊びを交えて先行発話につなぐ現象にも注目する。さらに、文をつなぐことを拒否する *whatever* (別に)、未完結のまましばしば発話を終結する *It is just that* 節構文などの「文をつながない」表現も射程に入れて、英語話者の複雑で繊細なもののとらえ方に迫る。

談話標識がつなぐもの

松尾文子（札幌保健医療大学）

談話標識にはさまざまな表現が含まれ、機能や特徴も多様である。談話標識に共通する最も一般的な特徴は、「話し手の何らかの発話意図を合図する談話機能を備えている」ことである。談話標識には発話と発話をつなぐ機能を持つものがある。多くの場合、話し手みずからの発話と発話をつないだり、別の話し手の発話を受けて談話標識でつないで次の発話が続ける。しかし、談話標識の用いられ方を観察してみると、単に発話をつなぐだけではなく、談話標識を用いることで話し手が聞き手と駆け引きしながら会話の流れを作ったり、ときには言いたいことを談話標識に託して、あえて全てを口に出さずにおくといった現象が見られる。

本発表では、以下の現象を、談話標識の *anyway, but, look, now, so, well, and therefore* を含む実例を挙げながら説明していく。①相手の発話をつなぐ ②発話の場面と発話をつなぐ ③談話標識単独で会話をつなぐ ④発話されない含意をつなぐ ⑤聞き手の注意をつなぐ

これらの例によって、談話標識が話し手の意図や心持ちを聞き手に伝えるのにいかに貢献しているか、聞き手が発話を解釈する際に談話標識がどのように役立つかが明らかになる。

話し手の「心」を伝える文のつなぎ方

安井 泉（筑波大学名誉教授）

談話を構成するありとあらゆる文は互いに自然な形でつながろうとしている。そこには磁力があり互いに引き合っているかのようである。話し手はあらゆる手法を総動員して磁場を作り出し、ことばの接続をダイナミックに作り上げていく。文をつなぐのは接続詞だけではない。文と文との緊張関係を作り出すさまざまな手法は、現在時制と過去時制の切り替え、譲歩、否定、否定疑問文、*no* の使用、*at first, try to do* などの使用、メタファーの連続使用など百花繚乱のごとくである。さらに言えば、*Not to change the subject* と言って話題を変えるのはなぜであるのかなど、一見不思議な現象も手法の一つとなっている。特定の構文を繰り返し、ことばのみを入れ替えるのも対比を浮き立たせる談話構成上の仕組み。一方、文のつなぎを断ち切り、話題を変えたいときにわれわれは何をしているか。ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』には、不思議の国の住人が話題を打ち切る手立てを次々に講じるのでアリスは疎外感を味わう。われわれの日常会話では想像以上に相手の答えを予期して問答がなされる。その予期が裏切られると敏感に反応する。ことばは何かを伝えるために使用されるが、逆にことばは何かを隠すためにも使われる。この真逆の視点も、この話題を論ずるときには重要になる。

英語語法文法学会役員

名誉顧問	八木克正	安井 泉		
会長	大室剛志			
事務局長	吉田幸治			
会計	前川貴史			
会計監査委員	住吉 誠			
運営委員	五十嵐海理	牛江一裕	内田聖二	梅咲敦子
	大竹芳夫	大橋 浩	大室剛志	吉良文孝
	澤田茂保	住吉 誠	滝沢直宏	中澤和夫
	西田光一	林龍次郎	吉田幸治	
編集委員	中澤和夫（委員長）			
	牛江一裕	大竹芳夫	大橋 浩	大室剛志
	金澤俊吾	吉良文孝	澤田茂保	滝沢直宏
	中山 仁	西田光一	林龍次郎	松村瑞子
	家口美智子	山岡 洋	吉田幸治	

発行日 2017 年 9 月 5 日

編集・発行 英語語法文法学会

代表者 大室剛志

事務局 〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1

近畿大学経営学部 吉田幸治研究室内

Tel.: 06-4307-3365（研究室） /

Fax: 06-6729-2493（経営学部教養・基礎教育部門）

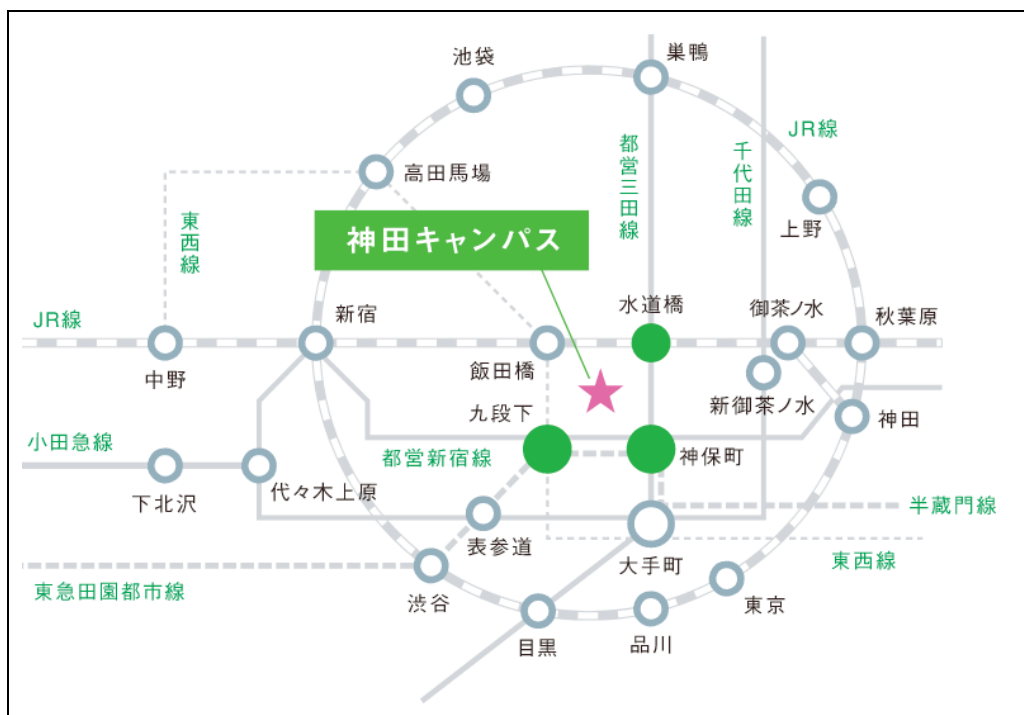
Email: segu.office@gmail.com

URL: <http://segu.sakura.ne.jp>

振替口座 02260-0-70393 英語語法文法学会

© 英語語法文法学会

神田キャンパスへのアクセス（路線図）



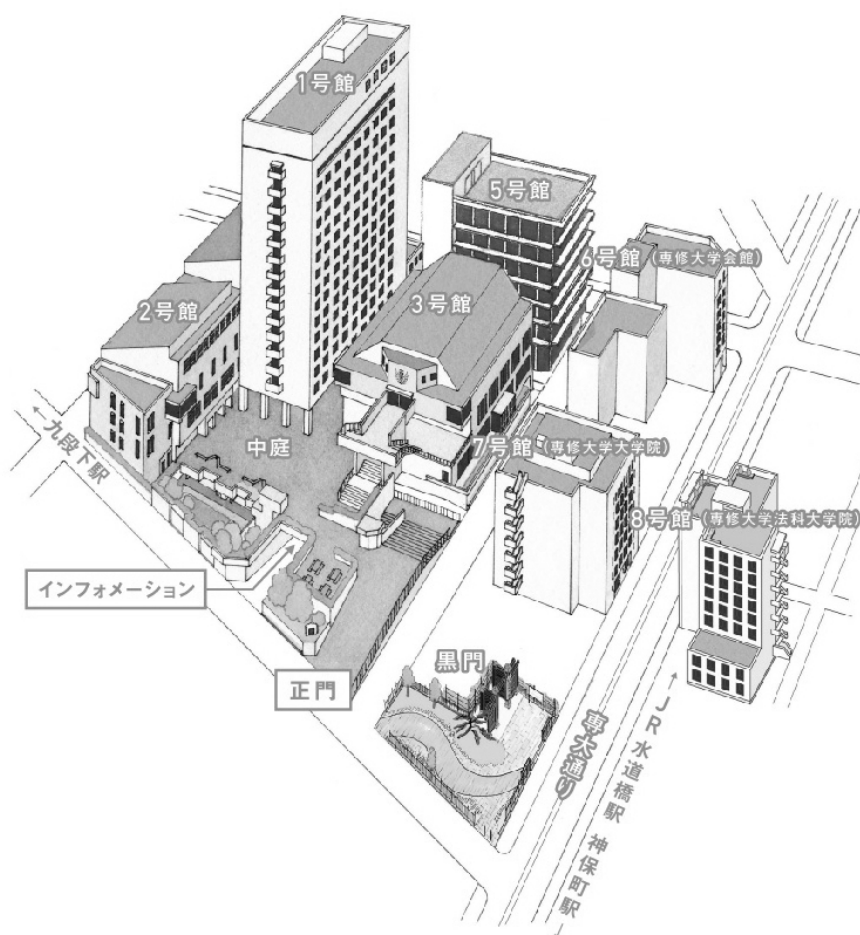
電車でのアクセス

- ・ 水道橋駅（JR）西口より徒歩 7 分
- ・ 九段下駅（地下鉄／東西線、都営新宿線、半蔵門線）出口 5 より徒歩 3 分
- ・ 神保町駅（地下鉄／都営三田線、都営新宿線、半蔵門線）出口 A2 より徒歩 3 分

<https://www.senshu-u.ac.jp/access.html>

会場案内

神田キャンパス・構内図

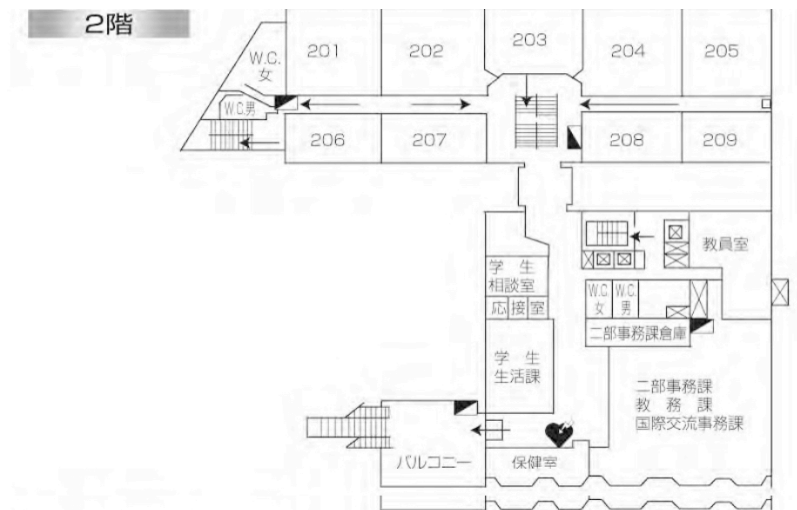


※食堂等の営業時間：1号館地下2階カフェテリア：11:00-14:00
(これ以外の店舗は閉店です。周辺にコンビニ、飲食店が多数あります。)

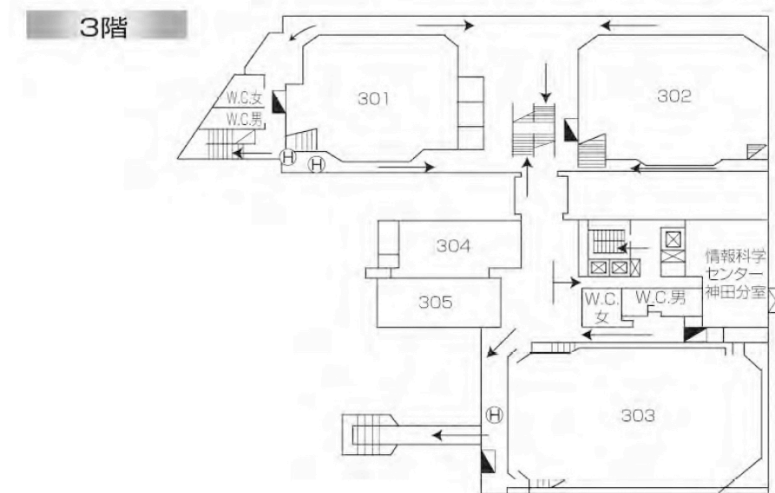
※大会当日は授業実施日ですので、静粛な環境の保持にご協力をお願い致します。

1号館教室配置図

ワークショップ、研究発表（203、204）、大会本部・運営委員会室（208）、アルバイト控え室（209）



総会、シンポジウム（302）、一般休憩室・書籍展示（301）



司会者・発表者控え室（ゼミ 43）

4階

